特264
894

長老

稻垣陽一郎著

# 始

第十輯

1937

特264
894

長者
稻垣陽一郎著

## 白石庵敬神叢書

一、本叢書は財團法人白石庵敬神會の助成金によりて發行せらる。

二、本叢書は我國に於ける基督教に關する智德增進の爲に幾分にても貢献せんことを目的とし、左の種類の小册子を發行す。

(イ)聖公會の教義に關するもの

(ロ)敬神修行に關するもの

(ハ)傳道に關するもの

(ニ)基督教藝文に關するもの

三、本叢書は一年三回發行す。

四、本叢書は長老稻垣陽一郎を監修者とす。

### 既刊

第一輯　長老稻垣陽一郎著「信仰、道德、恩寵」

第二輯　故ゴア監督著　稻垣長老譯「嘆願瞑想」

第三輯　長老前川眞二郎著「信仰生活の提唱」

第四輯　長老中村信藏著「大齋靜想」

第五輯　長老稻垣陽一郎著「世を逝れる者とその爲の祈」

第六輯　長老稻垣陽一郎著「神また人」

第七輯　長老宅間六郎著「救の確認」

第八輯　稻垣陽一郎著「生と死と來世」

第九輯　稻垣　文遺草「聖誕を壽ぎて」

第十輯　長老稻垣陽一郎著「悲」

# 小引

昭和十一年二月二十九日、我妻急逝後、間もなく、東京聖テモテ教會牧師長老高瀨恒德氏より、同教會に於て二回に亘る大齋修養講話を依囑せられた。當時心身にうけし衝擊尙いえず、我信仰生活は試練の下にありしこととて、之を擔當するに、躊躇せしも、依囑者は、特に當時經過中なりしわが體驗を聽かんことを懇望せられた。かくていためる心を懷きて、三月二十九日、兩回に亘り、「悲痛、訓練、恩寵」と題して語りし梗概は、此に記す所のものである。私的體驗を語るに際し、屢々、逝ける妻に言及するところあり。讀者幸に諒とせられんことを。

昭和十二年二月

妻逝きて一周年の大齋に際して

著　者

# 目次

一、弟子道と悲……四
(一)「悲の道」(Via Dolorosa)
(二)此世は試練の世
(三)聖徒は皆「艱難を經來れり」。
(四)「さびしくはさびしさを神にさゝげよ」
(五)剪定はよき結實の爲
(六)僞非悲を戒む

二、悲の功果……二
(一)悲は人をして眞摯謹嚴ならしむ。
(二)悲は眞の悔改を呼び起す。
(三)悲は「忍耐と信仰を學ふ學校」。
(四)悲は人をして神に近かしむ。
(五)悲は十字架に想ひ到らしむ。
(六)悲は天にあるものに思を寄せしむ。



三、如何にして悲に善處すべきか……三一
(一)、「御言の慰安」によりて……三二
聖書は我らに神は慰安の神なりと敎ゆ。
神の「めぐみはわれに足れり」と敎ゆ。
「我を强ふしたまふ者によりて凡べてのことを爲し得る」と敎ゆ。
「主與へ、主取りたまふ、主の御名は讃むべき哉」と神の攝理に一任すやう敎ゆ。
「それ神の前には皆生けり」と敎ゆ。
(二)、聖奠(サクラメント)によれる慰安によりて……三〇
聖餐は今日われらには「機に合ふ助となる惠を得んが爲の惠の御座」
「心にて主を仰げ」(Salsum Corda)(聖歌)
「不死の藥」(聖歌)
入院生活と病床聖餐による慰安。
陪餐の慶福(聖歌)
最後の陪餐。

結語……三九

# 一、弟子道と悲

神がわれらを取扱ひたまふに當り、悲を其訓練の一方法とせらるることあるは明である。舊約聖書のヨブの物語に見る所のものは、異常の例にて、妻子財産等一時に亡せて、忽ち無一物となり、剩へ身には、惡質の病を受けたとある。新約聖書には、聖パウロが其生涯に遭ひし諸々の「難」が記されてある。又其何なりしや、明ならずとするも、其身に帶びし「棘」(身體上の或故障)の取り去られんことを、三度も神に願ひしも、遂にそれは取り去られずに終つたとある。

或種の悲、若くは苦難は、キリストの弟子たるものに期待せられて居る。キリストの弟子道は、昔も今も十字架道――「悲の道」である。

『人若し我を責めなば、汝らをも責めん』と我らの主は仰せたまふ。

悲は「キリストに與かる」ことである。原初教會に於ては、「使徒たちは、御名



の爲に辱しめらるるに相應しき者とせられたるを喜」んだ。

聖パウロは、ピリピの信徒に書きおくりし書中に、「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ」と勸めて居る。キリストの心を心とするには、「己を卑ふして、死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひたまひし」キリストに倣ひて、われらも、われら相當に、十字架に直面せねばならぬ。然も此「十字架」は悲の形式をとることが屢々である。

キリストの弟子道には、悲は附きものである。「悲哀の人」にして、なやみを知りたまへるキリストに從はんとするには、われらも相當の悲を味ふことを覺悟せねばならぬ。弟子は其師に勝らず。主は種々の苦難と屈辱とを受けたまひしとすれば、其弟子たるものも、安易無難の信仰生活のみを送り得ない。「キリストと偕に死ぬ」、「キリストと偕に葬らる」、「キリストと偕に十字架に釘けらる」(勿論、象徴的の言ひあらはし方なるも)、と云ひし老使徒の時代より、今日に至るまで、苟も忠信なるキリストの弟子たらんとする者は、皆相當にキリストの御名の爲に迫害、苦難、不便、不利を嘗めて來て居る。

キリストの弟子道は、「狭き門」より入る「悲の道」である。

エルサレムには、今日にても、傳説的に、我らの主イエス・キリストが、十字架を負ひてたどりたまひしといふ「悲の道」(Via Dolorosa) といふのがある。われらの主は、『人若し我に從ひ來らんと思はゞ、己をすて、日々おのが十字架を負ひて、我に從へ』(ルカ九ノ二三) と仰せたまひしとすれば、われらも、或範圍、或程度、或種類の「悲の道」をたどらねばならぬ。

故稲垣　文の作詞に係る聖歌に、「悲の道」と題する一篇も、此意を寓せるものである。

一　たれかゆく　かなしみのみち
　　主とともに　末　ゆくてのすゑは
　　カルバリのおか丘

二　主はちちの　みむねかしこみ
　　わがために　十字架　じゆうじかおひぬ
　　かなしみのみち



三　かなしみの　迦　みちたどりゆかん
　　われもまた　十字架　じゆうぢかおひし
　　主にならひて

これは勿論、われらが聖地に旅して、此傳説の「悲の道」を、わが脚にてたどることを意味しない。若し然かすることを得ば、感慨一層深きものがあらう。之はわれらの信仰生涯に、或種の十字架を負はねばならぬことを意味する。

若し此世に悲なくば、如何に安樂に、如何に幸福に、我が生涯を送り得べきにと思はれるかも知れない。然(しか)でない。牛津大學(オクスフォード)の著名の一學者はいふ、『疾病、苦痛、失望、痛悔、失敗、試錬を取り去れ。此世は果て天國となるべきか。否、高尚なる向上心と、努力とは、衰頽し、靈の牢獄、心の墓場となるであらう』(モーバレ「罪と悲」)。

聖書の思想によれば、「此世は試練(こゝろみ)である」。試練には悲は其主要なる部分を占めて居る。悲のなき世は、或意味にて、安樂なる世なるかも知れない。さりながらそれは道德上低級なる世なるべく、又信仰上、價値少き世であるかも知れない。

かくては人の德のうち最も尊き、最も美はしき、純潔、無私、謙虛、犧牲、克己堅忍の愛は、其姿を消し去り、又これを鑑賞するものもなくなるであらう。かくては『人、其友の爲に生命を棄つ、これより大なる愛はなし』と我らの主の仰せたまひしが如き、勇敢にして崇美なる献身の行爲も、主と其公會の爲には、生命をも惜まざる殉教の精神も、或は福音の爲に甘んじて艱難を忍ぶ傳道の熱心も消えうすることとなるであらう。

默示錄の記者の見し異象によれば、神より勝利の冕を與へらるる聖徒は、皆「艱難を經來れり」とある。艱難を經ることは、聖徒たることの避くべからざる條件の如くせられて居る。

第十九世紀に於ける英國教會に於ける有名なる復興運動たる「牛津運動（オクスフォード・ムーブメント）」の三大指導者の一人たりし、學德兼備のピューシー博士は、其妻を喪ひ、其子女を喪ひ、晩年孤獨の身となりて、通常、人には堪へ難く思はるる悲を體驗した。されど神の遣はしたまへる悲の訓練を甘んじ受けて、其品格一段の光輝を放つに至つた。我妻逝きしとき我公會にて最も樞要の地位にある一監督は書を寄せて『貴



下は今より孤獨に善處することを學ばねばならぬ。其孤獨の感を神に捧げよ。或英人は宗教とは人が如何に孤獨に善處するかとのことであると言ふた。之は半面の眞理である。されど眞實の眞理である」と言はれた。悲が孤獨の形をとりて人に迫るとき、神のめぐみによりて、其孤獨に善處することによりて、其人格は確に一層精錬せらるるに相違ない。

妻逝りてさびしくばさびしさを
神にさゝげよとひとのおしへし

如何に訴へ、如何に祈るとも、神は或場合、我らより悲を取り去りたまはないこともある。さりながらかゝる場合、よくこれを堪へ忍ぶ能力（ちから）を與へ、此難關を切り拔けることを得させたまふ。

悲は正き心持ちにて之を受くるものには、信仰上、他の方法によりて贏（か）ち得ざる善き「果」を齎らすことがある。『一粒の麥、若し地に落ちて死なば、多くの實を結ばん』。初春に果樹の枝を剪定（せんてい）するは、其樹を迫害するのでない。晩夏に多くの善き樹果を結ばしめん爲である。

悲は屢々我らの信仰生活に新生面を展開せしむる。神のめぐみは、必ずしも我らの所望通りの過程にて與へらるるものでない。悲は事態上、たとひ好ましからずとするも、一種變形せる神のめぐみであることは屢々である。

さりながら悲には我らの爲に益とならざる種類のものもある。

無益の悲はそれである。單に過去を悔ゐて泣き悲むのみにては、何ら道德上にも、信仰上にも、助とならない。十人の乙女の譬に於ける愚なる五人の乙女は、みづから油の用意を怠りながら、新郎來るとききて、あはたゞしく、油を得んとて出でゆきし間に、門は閉ぢられ、『主よ、主よ、われらの爲に開きたまへ』と、徒らに悲しみとあるが如き、其例である。

虛僞の悲も此類である。我らの主がいつくしみたまひしといふ富める青年は、主に從ひ、十字架を取る前に、其財產を賣れと命ぜられ、「哀み憂へて去りぬ」とあるが如く、又ゲツセマネの園に於ける弟子らの如く、單に「憂へて寢む」らば何の益もないであらう。



ユダの悲はやる瀕なき痛恨の形をとり、遂に縊死に至らしめた。ペテロは三度主を否みてのち眞に悔ゐ改めて、一層献身仕主の覺悟を決めた。復活後に主の現はれたまひし人物の一人にケパ（ペテロ）のあるは、此點に於て意味深長である。然るにユダは縊死した。

信仰を以て、正しく悲に直面するときは、結局、古の聖詩人と同感に、又同樣の結論に達するであらう。

くるしみにあひたりしは、われによきことなりき
これによりて、われ神の律法を學び得たり　（詩篇第百十九ノ七・十一）

# 二、悲の功果

相當の心掛にて、聖靈の指導を仰ぎ、神の助によりて、悲に直面するとき、悲が我らの信仰生涯に齎らす功果は決て尠くない。

(一)、悲は人をして眞摯ならしむ。

『「悲哀の莊嚴」といふことがある。凡そ卑劣なること、凡そ下品なること、凡そ浮華皮相なることは、此「悲哀の莊嚴」の前に、皆其姿をかくす。

悲は人をして謹嚴ならしむ。悲は人の深味を增す。知識は人の間口を廣くするかも知れない。悲は人の奥行を深からしむ。

世の樂は肉を喜ばしむ。されど之が爲に其靈は屢々重傷を受ける。衣食住充ち足れる生活には、身の不自由はないかも知れない。されど靈は極めて貧窮なることが多い。『禍なる哉、今飽くものよ、汝らは飢えん』。『禍なる哉、いま笑ふ者



よ、汝らは悲まん』と我らの主仰せたまふ。

悲は虚僞を去り、浮華を脫し、輕薄を免がしむ。

(二)、悲は眞の悔改を呼び起す。

『われは主に罪を犯したり』と、昔、ダビデは懺悔した。人の罪を犯すは、豐滿充足、氣緩み、心傲れる時に多い。涙のうちに、人は罪の樂を敢てすることはない。

悲は罪人をして反省せしむる爲に、神の調劑したまひし「苦がき杯」である。自恣放縱、思ふまゝの生活を爲し得る間、人は反省すること尠いかも知れない。さりながら人はいつまでも、自恣放縱の生活を續け得るものでない。心うきくと罪に惑溺して、改悛せざるときは、何時か悲の底に沈まねばならぬ。零落の極に達すれば、人はおのづから「我に反りて」、『起ちて我父に往きて、父よ、われは天に對し、また汝の前に罪を犯したり…』言はんと氣附くに至る。(ルカ十五ノ十七)

(三)、悲は古より聖徒が「忍耐と信仰とを學ぶ學校」である。

七度練られて、銀に純となり、悲の坩堝に入れられて、聖徒の品格は次第に錬へらる。勿論、悲によれる訓練は消極的である。聖徒的品格の涵養には、積極的に神のみぐみに與からねばならぬ。されど一事は明白である。悲を厭ひては、悲を避けんとしては、悲に反抗しては、信仰生活の深所に進み得ない。

(四)、悲は人をして神に近かしむ。

悲は人をして祈らざるを得ざらしむ。人生には如何に切實にして、如何に眞摯なる人の同情も尙如何とも爲し得ざる悲がある。かかる際、我らの唯一の避所は神である。われらをして覺えず神の許に走らしむ。然かも神の許に至る道は祈である。かゝる際、祈は恐らく本人にとりて唯一の慰であらう。

我妻俄に逝きしとき、我が身にあまる同情を各方面より受けた。之によりて慰められ、之によりて激勵せられた。然るにこれは外より與へらるる所のものである。われ自身の內なる心境は如何。亂れて居らざるか、騷ぎて居らざるか。若し



然りとせば、其調整は如何、我は如何に此間に善處せんとするか。如何ほど外より同情は表せられ、激勵は與へられても、われ自身の內に、神より直接に來る慰安を味はざる限り、ふかき悲の際、わが心の調節は到底望まれない。此種の場合、此種の調節を唯神のみわが爲に爲し得たまふ。

これが爲にはわれは神の御許に來ねばならぬ。神の御許に來りて祈らねばならぬ。祈りて、神よりの慰と力とを得なければならぬ。然らずば、此信仰生活の一「危機」——「非常時」を突破することはできない。

かくて悲は、平生の一定時の祈の外に、幾度となく、われらを神の御許に追ひ立て、驅り立てゝ、祈らんとするに至らしむ。

勿論、人生に於ける喜悅や、幸福や、感謝は、われらをして神の御許に來らしむ。されど悲はむしろ人を神の御許に追遣る。

わが爲には此世にまたと掛替のなき、神のごとなき賜物を俄に喪ひて、われは今まで經驗せしことなきほどに、切實なる祈を神にさゝげしこと幾度ぞ、人なき

處、神の御前にわが心を灑き出せしこと幾度ぞ。全身の激動と、滿眼にとめどなくはふり落つる涙とともに、悲痛なる祈をなせしこと幾度ぞ。われの弱きなりといはばいへ、小さながらも、極めて小さなながらも、之はわが爲に一種の「ゲツセマネ」であつた。

古の聖詩人は悲痛の極に於て、『我たゞ祈るのみ』（詩篇第百九ノ四）と叫んだ。然り。『われたゞ祈るのみ』。

不意の衝擊に、身も、心も、ともにいたく疲勞して、感傷的となり居たとするも、遣る瀨きな當時わが心の遣り處は、實に祈であつた。

祈は昔も今も、悲に善處する最初にして、又最後の手段である。

（五）、悲は人をして十字架に想ひ到らしむ。

昭和十二年三月八日、大齋第二主日（妻急逝直後の主日）、例によりて武州松山の教會にゆき、つとめ終り、午後三時前、始めて妻亡き家に歸つて來た。先週以來、心も身もいたく疲勞し居りし爲もあらん、夕暮に至りて、みづから如何とも



爲し得ざる孤獨の感と、空莫の念、禁じ難く、起座ともに堪へ難き一種の重壓を覺へ、ひとり祈せんとて家を出で、聖公會神學院境内の禮拜堂—朝夕の勤行營まれ妻も在世中、常に聖餐に列し居たりし禮拜堂に入つた。通常、夜間は玄關前に常夜燈を點じ、堂内は暗黑なるに、此夕には如何にせしか、玄關前の常夜燈は點ぜられず、禮拜堂内正面チャンセルの天井裏なる左右二個の隱燈（故マキム監督の寄贈にかかる）によりて、祭壇上のオリブ臺に象牙細工の十字架のみ、周圍の暗黑中に、はつきりと照り出されて居た。點燈の間違ひは、如何にして生ぜしにもせよ、當夜のわが身にとりては、これは實に驚くべき一種の啓示であつた。これは永く忘れ得ざる印象極めて深き體驗であつた。「十字架を見詰めよ」、「悲の人よ、十字架を思へ」、「主とともに、主にならひて、十字架を負へ」との神の啓示なりと直感した。今のわが悲はわが身にとりての十字架である。此十字架を負ふて、主に從へとのことであつた。妻が曩に歌へる

かなしみの　みちたどりゆかん
われもまた　十字架負ひし

を實感せしめられた。毎朝毎夕の勤行に、此禮拜堂に入りて、此祭壇上の此十字架を見て居なかつたといふのでない。常に眺め居た十字架に其新き意義を示された。少くとも、一週間前にわが生涯に絶大なる衝撃を受け、諸方よりの同情と激勵のありし間にも、尙心に悲哀、空莫、孤獨の念禁ぜず、何とも詮方なき思ありし當時の我身には、これは新啓示、新警告であつた。

萬事好都合のとき、人は十字架を想はぬかも知れない。悲は人をして、「悲哀の人」の負ひて、釘けられたまひし、十字架に想ひ到らしむ。

キリストの弟子たるものには、皆相當の十字架がある。之を負ふて主に從はねばならぬ。得意や、滿足の時と異り、悲は特に此事を敎ゆる。

日々、已が十字架を負はずしては、弟子となり得ないと主は仰せたまふ。十字架拔きの基督信徒とてはあり得ない。

『善良なるクリスチアンたらんとすることは、容易のことでない』と、曾て故ゴア監督はいつた。之が爲に訓練を經なければならない。悲は確に其一手段である。



一過程である。訓練は其如何なるものにても、これを受くる身には、つらひ、苦しい、されど必須である。

（六）、悲は人をして、天にあるものに念（おもひ）を寄せしむ。

「汝ら上にあるものを念ひ、地にあるものを念ふな」。（コロサイ三ノ二）

地に在る愛するものに別れて、我らの心は、おのづから天に屬するもの、永遠のもの、朽ちざるものを思ふに至らしめらる。此種の悲の爲に精煉せられて、肉に屬するものよりも、靈に屬するものに多く念を寄するやうにせしめらる。

イースターの曉に、御墓の側にて、在りにし日の思ひ出に、ひとり泣きてありし主に奉仕せし女弟子たちは、『誰を求むるか、彼は此にあらず、甦りたり』と告げられた。

愛する者の在りし日の思出つきぬ思出は、殘れる者をして、屢々追慕追懷措く能ざりきらしむ。さりながらわれらは「望なき人の如く嘆く」べきでない。「主に在りて、世を逝りし愛する者は、肉の重荷を卸すのち、主と偕に在りて

樂む」狀態に入つたのである。幾度反覆しても、取返しやうのなきことに思ひ煩はず、神のめぐみにより、却て以前に勝りて、一層よく殘る生涯を聖別して、主に仕ふるやうつとむべきである。

さすれば悲は却て、神の慈悲とによりて、われらの生涯の聖別の機縁となる。



## 三、如何にして悲に善處すべきや

われらは好んで我らの生涯に悲を求めんとするのでない。されど此世に生を享くる以上、何人も或種の悲を味はないものはない。要はかかる場合、われらの取るべき心の態度如何である。即ち如何にしてわれらは悲に善處すべきかである。

われらの生涯に悲生ず。されどわれらは神を信ず。其神の愛を信ず。又其神は常にわれらの爲に最善を圖りたまふと信ず。たとひわれらにはつらく、苦しく、時としては堪へ難く覺ゆる場合にても、(これはわれらは「近眼」にして、唯眼前のことの外、見得ないによるかも知れない、又われらはあまりに自己中心的に事を考ふるによるかも知れない)、神は事の全局をみそなはし、われらの爲に結局、最もよきやうに取計ひたまふに相違ないと信ぜねばならぬ。

悲に直面せる場合、われらは御言(みことば)とサクラメントによりて、之に善處し得る。

（一）、「御言の慰安」を受くることによりて善處する。

降臨節第二主日の特禱に、「御言の慰安をうけ、耐え忍ぶことを習ひ」とある。

これによれば、神の御言は之を味ふ者をして、之によりて「慰安をうけ」又之によりて「耐え忍ぶことを習はしむ」。

神の御言の記錄たる聖書は、悲に逢へるものに、神よりの慰安のメッセージを與へる。悲に逢ひし者は、心、多少とも亂るるは自然である。況んや、愛する者との死別に於てをや、況んや、其死別は突急に來るに於てをや。殘れる者は、この此不意の衝擊によりて、種々の思煩ひを生ずる。此度此種の體驗を爲せる際、聖書の日課にマルタに對するわれらの主の御言があつた。『マルタよ、マルタよ、汝、さまざまの事によりて思ひ煩ひて、心勞す。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ。』（ルカ十ノ四一、四二）。その『唯一つ』とは何か。主の足下に坐して、御言を聽くことである。今日のわれらにとりて、御言を聽く途は、聖書を「讀み、懇ろに學び、かつ味ひて、靈魂の營養と爲」すことである。

かくすることによりて、悲の際、「思ひ煩ひて心勞す」ること去り、主の與へた



まふ平安を心に覺ゆる。

聖書は先づ神は慰安の神なりとわれらに敎ゆる。

「讀むべき神、われらの主イエス・キリストの父なる神、即ちもろ〳〵の慈悲の父、一切の慰安の神、われらの凡ての患難のうちに慰め、我らをして、みづから神に慰めらるる慰安をもて、諸般の患難に居るものを慰めたまふ」（コリント後一ノ三、四）。

人の同情はうれし。人情の最も美はしき、最も純なる、最も溫きものは、人の不幸、悲哀、災難を見て激發する。不幸、悲哀、災難の際、之を受くることはうれし。これによりて慰めらるることとる勘くはない。されど人間の同情には限度がある。如何に深厚に、如何に切實なる同情にても、人生の或極所に屆ないこともある。かゝる際、唯「もろ〳〵の慈悲の父、一切の慰安の神」のみ、われらを慰め得たまふ。

聖書は神のめぐみはわれらに足れりと教ゆる。

「肉體に一の棘を與へらる」。「われ之が爲に、三度まで之を去らしめたまはんことを主に求めたるに、言ひたまふ、「我がめぐみ汝に足れり、わが力は弱きうちに全ふせらるべければなり」（コリント後十二ノ九）と。取り去られんことを三たびまで願ひ求めし「棘」は、依然として取り去られずに殘て居た。されどこれに堪ゆる力を、聖パウロは神より與へられた。

悲に逢ふときは、人はおのれの弱きを感ずるときである。其弱きを感じ、謙れる碎けし心に、神のめぐみ——神の力——神の慰が注ぎ込まるるのである。みづから足れりと思ふ間、みづから力ありと傲る間、神のめぐみ、神の力、神の助は作用する餘地はない。『われ弱きときに強し』とは、基督教的逆說である。然かも眞實なる體驗である。

聖書は「我を強くし給ふ者によりて凡ての事を爲し得るなり」（ピリピ四ノ十三）と教ゆ。

これも亦聖パウロの體驗である。悲にあるときにも、「われを強くしたまふ者」



によりて之を忍び、之に耐え、此間に善處し得る。われ自身は弱い、自身は堪え難く覺ゆる。されどわれひとり之に當るのでない。「われを強ふしたまふ者」、われとともに在し、われの傍に在して、われを強ふしたまふからである。これは基督教信仰ある者のみ體驗し得る特權である。

聖書は神の攝理に一任するやう教ゆ。

聖公會に於て埋葬式に用ひらるるヨブの言は此事を示して居る。『主與へ、主取りたまふ、主の御名は讃むべき哉』。これは實に偉大なる言明である。大膽極る眞の勇氣の言明である。之こそ眞の「信仰の冒險」の言明である。ヨブ記によれば、此言はヨブが妻子を初め、其あらゆる所有物を一切を一時に喪失せし際の言明である。

此言葉の前半は言ひ易い。されど其後半は神の攝理に滿腔の信任をおかざる限り、何人も言ひ得ない、言ひ澁る。然るにヨブはあらゆる艱難の後に、無一物の身となりて、尙、よく此言の前半のみならず、後半をも附け加へ得た。他人の埋

葬式に臨みて、此言を聽きしことは幾度もある。又みづから埋葬式を司どりて、此言を唱へしことも、幾度もある。然るに此度は他人のことならず、又職務上のことならず、我一身上の實際の事實として、此言は我が身に落ちて來た。我が妻は二十三年前、神より我に「與へられた」。二十三年間の結婚生活の後に、「主取りたまふた」。二十三年前、「主、與へ」たまひし時、神のこよなき賜物として感謝した。また二十三年間、感謝の念は絶へず持つて居た。されば二十三年後に「主取りたまひし」ときにも、感謝すべきである。然り。二十三年間、公私兩面に亘りて、我妻は、我助となり、我が力となり、我が慰となり、又最もよくわれを知れる我が友となり、我が忠言者たりしことの故に、我は神に感謝すべきである。げに我が妻は我に與へられし神の大なる賜物であつたことを神に感謝する。

神は常にわが爲に最善を爲したまふ。悲の極所に於て、心騷ぎ、思亂るることありとも、神のめぐみによりて、心も、思も、次第に新情勢に調整せらるるに及んで、神の御旨を一層よく諒解し得るに至る。

此事は世を逝りし者に就て考ふるとき、一層切實となる。



我が今の悲とは何か。何に因るか、何より來れるか。

勿論、突如、愛する半身を喪ひし衝擊より來て居る。さりながら詮ずる所、之は人情の自然によるとはいへ、自己中心的なる思煩ひの爲にあらざるか。殘りし身の寂寞孤獨の念、堪へ難く覺ゆる心の空寞より生ずる哀愁、見るもの、觸るるもの、實に堪へ難く覺ゆる愛する者の聯想と思出の爲に、之を他の角度より、他の觀點より見る心の餘裕を缺くが爲にあらざるか。

翻て之を神の召を蒙りし者より見るときは如何。

老後に妻を喪ひて、孤獨寂寞の念に打たれてありし一英國宣教師は、其際、一友人より、『わが願は世を去りてキリストと偕に居らんことなり、これ遙に勝るなり』との聖パウロの言を傳へられた。其宣教師は我妻逝きしとき、弔問の際、自分の場合に、友人より與へられし此言を、我が身に傳へられ、『これ遙に勝るなり』、『これ遙に勝るなり』と反覆して辭去せられた。其後、或席上にて邂逅せしとき、又此言を我が爲に反覆せられた。

聖公會祈禱書「埋葬式」の所に、「主を信じて、世を逝りし者の靈、主と偕に居

りて樂む」とある。此世に在る間保ちし身體の故障や、疾患を離れて、今や「主と偕に在る」環境に移されたりとせば、本人の爲に寧ろ感謝せねばならぬ。

況んや、夫妻位置を轉倒して考ふるとき、我が身先づ神の召ありて世を逝り、後に殘りし病餘の妻が、此悲を體驗するよりも、我自身之に當れるに於てをや。

聖書は又『神は死ねるものの神に非ず、生ける者の神なり。それ神の前には皆生けるなり』と敎ゆ。

愛する者と地上に別れて、人はおのづから靈界の奥義——「來世の生命」、「聖徒の交通(まじはり)」等に思を寄するに至る。

かくり世も　うつしこのよも
おなじ主の　しろしめすくに
主にありて　ねむれるものは
みもとにて　さこしへにゆく
主にあれば　まじはりたえず
なつかしき　かげはみえねど

（古今聖歌集第三百三十一）



先年、此歌詞を筆せしときは（聖歌集所載のものは聖歌改訂委員にて文字を改めし點あり）、主の此御言の意をあらはさんとせしものなるも、此歌がわが妻の逝世に際し、出棺式、埋葬式、記念禮拜式等に用ひられんとは豫想して居なかつた。然るに此事は單に敎義上の問題としてはなく、實際問題として迫て來た。又曩には日本聖公會第十八回總會に提出すべき逝世者の爲、又逝世者記念禮拜式等に用ふる祈に關する調査に與かりし際考察せし事項に、實際に直面することとなつた。從來說敎もし、講義もし、文章にも記述せし事實に直面することとなつた。從來とても、死の事實に遭ひしことなしといふのでない。されど此度は此世にて掛け替のなき者を喪ふて、最も切實に、我らの主の御言を思ひめぐらすに至つたとの意味である。恐らく此御言ほど、此世にて愛する者と別れし者にとりて、希望と光明と慰藉を與ふるものは、他にないであらう。

(二)、聖奠(サクラメント)によるなぐさめによりて善處する。

聖奠(サクラメント)――殊に聖餐によりて、悲にある者は、最も適切に神よりの慰安(なぐさめ)を與へらる。

『我らの大祭司は我らの弱きを思ひ遣ること能はぬ者にあらず、罪を外にして、凡ての事われらと等しく試みられ給へり。この故に我らは憐憫(あはれみ)を受けんが爲また機に、合ふ助となる惠を得んが爲に、憚らずして、惠の御座に來るべし』(ヘブル四ノ十四、十五)。今日のわれらにとりては、此「機に合ふ助となる惠を得んが爲に憚らずして」來る「惠の御座」は、聖餐であるといひ得る。これほど直接に、又これほど的確に、神のめぐみのわれらに與へられる神定の手段は他にない。

聖餐は實にわれらが親しく「心にて主を仰ぎ」、力と慰を賜はる爲に、神の設けたまひし「恩惠(めぐみ)の御座」である。

逝ける我が妻は、曩に「心にて主を仰げ」(Salsum Corda)と題する左の一篇によりて、このことを歌ふて居る。



『心にて主を仰げ』(Salsum Corda)――祈禱書二五四頁――

一　みさだめの　にえのまつりに
　　主のみかて　かしこみうけて
　　わがこころ　主をあふぎなば
　　なぐさめと　みちからたまふ

二　世肉　よとにくさ　あくまのさそひ
　　うちそとに　おしせまるとき
　　わがこころ　主をあふぎなば
　　かつちから　ゆたかにたまふ

三　あらなみの　たちさわだちて世
　　わざはひの　おほかるよにも
　　わがこころ　主をあふぎなば
　　なりにあふ　みたすけたまふ

四　やみなやみ　いまはのきはに
ゆくさきの　さびしきときも
わがこころ　主をあふぎなば
とこしへの　のぞみをたまふ

さりながら一旦、病に罹りて、みづから親しく此「恩惠の御座」に來り得ざるときも、尙われらは病床聖餐をうくることによりて、此めぐみに與り得る。

曾て病の床にあり、體弱りて、靈もさびしかりしとき、病床聖餐によりて受けしめぐみのわが體驗を、左の如く記した。

一　身はつかれ　魂はさびしく
やまひのとこに　うれひなやみて
主をよばふ



二　『屋根の下に　入れまつるには
おそれおほきも』　主のほかわれに
たすけなし

三　『汝が家に　今宵やどらん』と
のたまひし主よ　いやしき身にも
のぞみませ

四　罪をくゐ　心きよめて
かしこみうくる　永遠の生命の
靈のかて

五　とこしへの　いのちにいたる
「不死の藥」に　魂つよめられ
身もかろし

（ルカ七ノ六、ルカ十九ノ五參照）

註　聖餐のことを古代教會の師父は「不死の藥」と稱した。
此拙作には長老山本秀治氏の作譜あり。

昭和六年（千九百三十一年）十月二十九日、聖徒シモン及びユダの日の朝、神學院禮拜堂にて、聖餐に陪してのち、午後三時過、妻は突然輕微の腦溢血症を生じ右手右脚一時不隨となつた。後、聖路加病院に入院、堀内内科の同博士の手當を受けて、療養約五十日。其間毎主日に聖餐を領けた。之は本人にとりて、人の窺ひ得ぬ慰と力とであつた。

入院後十日目十一月九日にいふ

みからだとみ血のたまものわれうけて
心安らかに身は輕ろらけし

「今朝陪餐。主のなぐさめあり」。（十一月二十二日）

又いふ

身、病床にありて、禮拜堂に出で得ずとも、病床聖餐をうくることによりて「いのちのかて」を賜はる。

主の日なり祈に來よとさし招く
つきぢ御堂のかねのゆかしさ



（十二月十三日主日）

主の宮につどひも得せで
やみふす身に
主は來ましたまひ
いのちのかてもて
養ひたまふ。

退院後も、稀に見ると言はれし格外の高血壓を持續しながら、尚約五年に亘り、養生をつとめし間にも、自分所屬の教會（聖三一教會）に往き得ざりしが、神學院禮拜堂にて毎主日、並に聖日には、聖餐に陪して、力と慰とを得て居た。懷中日記にいふ。

一月十五日（昭和八年）
第三主日にて夫の司式なり。陪餐す。心地よし。
主日毎にうくる主のめぐみは、我が生涯の力なり。
註。月の第三主日の司式當番は著者

昭和十一年二月十六日の主日には朝七時、共に家を出で、本人が幾度か往返せし途を、兩人相伴ふて、神學院禮拜堂にゆき、我司式の下に陪餐した。之は兩人

偖に此禮拜堂にて聖餐にあづかりし最後のものであつた。

逝世一週間前なる二月二十三日の日記にいふ。

二月二十三日。大齋前第一主日、朝七時チヤペルにゆく。（註、陪餐の爲）

二月二十四日。聖徒マッテヤ曰。聖餐をうくる爲にチヤペルにゆく。

越へて二日、逝世の三日前、大齋始日にいふ

二月二十六日。大齋始日。わが身七時二十分、チヤペルに行き陪餐す。今日も朝來雪ふる。

之は本人の此禮拜堂にての最後の陪餐にして、又地上に於ける懷中日記の書き收めとなつた。

然かも地上に於ける日記の書き收めは、聖餐に陪せし記事を以て終て居る。

越へて二月二十八日、午後四時頃、氣分快からずとて休臥せしが、七時過ぎ、容體異常に思はれ言語も不能となりし爲、來診中の醫師に諮りて後、突差の間に、病者聖餐式を行ふた。これにて、本人は此世に於ける最後の聖餐（Viaticum）—



「彼世への旅路の糧」）をうけた。引續き抹油式を行ふた。かくて本人が自分の臨終の爲に筆せしといふにあらざるも、自作の聖歌に記せし如くなつた。

「つかれたるものよ　われにきたれ」と
まねきのみことば　たまひしエスは
このよのたびぢに　つかれしわれを
主のみそばちかく　いこはせたまふ

かくて

「よのをはりまでも　つねにまもれ」と
かたみのまつりを　のこししエスは
われらもまねきて　あまつうたげの
さちさかえとを　のぞませたまふ　（古今聖歌集第三百九七節、三節四節）

やがて翌朝二月二十九日午前四時三十三分、最後の呼吸の終るや、其直後に、容顏一種清美なる平安の狀を呈した。これはわが身にとりては、一種の啓示であつた。思はず「死面（デス・マスク）」を取て置きたいと傍の人々に言ひしほどであつた。之は曩

の聖奠（サクラメント）によれる超自然的なる恩惠の直接の證左とも稱すべきか、又は本人の靈の勝利、卽ち肉體は病によりて遂に其活動を終止せしも、靈はよく病體を征して、其眞相を此に示せしといふべきか。或は又兩者なるか。いづれにもせよ、之は我が身にとりては、ことなき感謝と慰藉となつた。此事を聞きし我が從妹は、遙に朝鮮より書を寄せて、『かゝる死相に見る聖美は、其平安を示すものなるが故に喜ぶ』とあつた。

病は一種の試錬に相違ない。然かも體と靈とは密接なる關係がある。體、弱れば、靈は之が影響を受くるを免がれない。五年に亘る療養生活に於て、本人は機會ある毎に、聖餐に陪した。それは聖餐によりて我らに賜はるめぐみは、「分餐辭」に「願くは汝の爲に與へたまひし（流したまひし）主イエス・キリストの體（血）汝の體との靈魂とを限りなき生命に到らせたまはんことを」とあるが如く、靈の爲なるとともに、又體の爲でもあることを平生確信して居たからである。

悲の際、殊に病の時、神より賜はる大なる慰安の一は、聖餐を領くるにあると のことは、主の此婢の生活によりても、幾分なりとも證せられたことを感謝する。



# 結　語

世に悲多し。これは信仰生活を送るものに免かれざる一種の訓練である。されど主に在るものは、神のめぐみにより、相當の信仰によりて、他の場合に見出し得ざる慰安と教訓とを此間に體驗することは難くない。かくすることによりて、悲は變形せる神のめぐみとなる。又、神は慈悲ふかき父なる神にて在す以上、堪へ難き試練に遇はせたまはず、必ず之に添へて逃ぐる道を備へたまふ。唯、かゝる際、振ひ興すことを最も必要とするものは、我らの信仰である。

「天路を指して」のわれらの信仰の旅路には、いつ如何なることの突發するか知れない。われらの生涯の「今」以後は、一切神の御手のうちに在る。さればわれらは常に「夕のいのり」（聖公會祈禱書附錄）の左の一節を、平生の祈としたい

神よ、願くは……日々行爲を愼みて、死を懼れず、生くるも死ぬるも、常に主に屬することを得させたまへ。

昭和十二年二月三日印刷
同　二月五日發行
（定價金貳拾五錢郵稅共）

著者　東京市豐島區池袋三丁目一六一二　稻垣陽一郎

發行者　東京市豐島區池袋三丁目一六一二　白石庵敬神叢書發行所
右代表　稻垣陽一郎

印刷所　東京市豐島區西巢鴨四ノ一二六　學園印刷所

印刷人　東京市豐島區西巢鴨四ノ一二六　澤田文雄

終

# SORROW

## —ITS SIGNIFICANCE AND BENEFIT IN SPIRITUAL LIFE—

LENTEN MEDITATIONS

By

THE REV. YOICHIRO INAGAKI, BD., S.T.M., DD.

ISSUED BY

THE IMAIZUMI FOUNDATION

February, 1937